

男教師の

思っていること

能

勢

勲

(一) 『幼稚園の教師は男にも適した仕事です』

この題目は新年号にのっていたそうだが、私は不勉強者だからまだ読んでいないのである。しかしこの題目をみた時、くすぐったいような気持と、まだこんなことが云われているんだなあと淋しい気持とが交差しました。なぜなら私の園にもよく参観の方がみえて、男の先生って一体どんな教育をしているのだろうか？ と興味深そうにみていかれる先生がある。確かに珍らしい存在なのでしょう。が何だか嫌な気持がします。人間は自分が真剣にしていることを興味本位でみられることは

たえられないことです。だからそのような場合、私は興味を取除いてもらうべくすこしも長時間話し合いをすることにしていきます。教育という仕事は興味や思いつきで出来ることではないことを知ってもらいたいからです。と同時に教育、人間の教育ということをはり上げていけば教育の場として人生のトップにある幼稚園の教育ということに自然に気がついてしまうのだから私は幼稚園にとめていれることを当然に思っているからです。幼稚園は女の仕事……、それはあまりにもかたよった昔風な考え方ではないでしょうか。人間の教育ということに男性だ女性だか

らということは考えられないのです。女であれ男であれ、子どもと真剣に取組んでいく教師であれば、問題外のことになりはしないだろうか。男女各々がその特性、持味を生かして助け合っていくところに本当の人間形成がなされていくのだと思います。子どもが小さいから母親のような愛情が必要だ、だから女の子がいいんだと云うのだったら、父親の持つきびしい愛情も私は必要だと云いたい。小さければ小さいほど両性の愛情が必要なのではないでしょうか。もし女の先生がたが母親の愛情ということばにあぐらをかいているとすれば、とんでもないことだと思えます。お

たがいに手をとり合ってよりよき子どもの生長の為に進んでいきたいと切望します。確かにちよつと考えたときには女にむいた仕事のように思えます。男にはついていけない面もあるでしょう。しかしそれは今までが大体女ばかりで形成された社会だったから女に合うような面ばかりが強調されてみえるのです。これから発展し更に力強いこの社会にするためにはまだまだ大きく梓をひろげていかなければならないと思います。それには男の力も必要でしょう。梓をうちくたくことはなかなかむづかしいことです。ややもすれば今日にあつてもまだまだお嬢さん仕事、奇麗ごにみられ、教育界からもなにか忘れもののような存在になっているのも、一つには今までが女だけのやさしい社会だったということも云えると思います。世の幼児教育者は口を開けば幼児教育の重要性を叫び、幼稚園の義務制を唱えています。私はまだまだそんな段階ではないと思っています。外に目をむける前に幼稚園の教師自体が自分に目をむけてきびしくなければいけない段階だと思ひます。

一方なぜ男の教師がふえないのでしょうか。残念です。実に残念です。私のように子どもの頃から幼稚園の中に育ってきた人間は別ですが、外からみている私の友人はこんなふう云っています。「うん幼稚園の先生か……やってみなければ女ばかりだから、それにあんな細かい面倒なことは嫌だな。しかし魅力はある仕事だよ。年とつたらやってみるか」。彼らにはどうしても踏み切れぬものを感じるのでしょうか。今までの幼稚園、自分たちの子どもの頃の幼稚園しか印象にのいていないのだからふみ切れないのも無理ないでしょう。それにスケールが小さいという見方も男にはあると思います。わずかに二、三人から十人位の教員数で、しかも子どもも一、二年で手放していく。何はともあれ、外で眺めていないで、思いきって飛込んでくれるように心から願っています。子育ては女の仕事なんていう古い気持をすつとばしてほしいと思います。

(二) 子どもにぶつかって

日に日に立派に成長していく子どもの姿はうれしくもあり、うらやましくもある。自分の一日と子どもの一日の充実の違いをいやというほどしらせる。おはようと赤い顔してとんでくる子どもの心に「おはよう今日も一日楽しく遊ぼうぜ」と心で挨拶し、さよならと手を振ってかえる姿に大きくなれよと祈る。子どもにとつても自分にとつても貴重な一日一日なのだ。その一日を大切にしたい、が大きくなれよと云うかわりに「すまなかつたな今日は、かんにんしてくれよ」と云う日の何と多いこと、明日こそは明日こそはで一年がたつてしまふ。しかしマンネリズムにはなりたくない。子どもの努力生長には追いつけなくても、せめて明日への努力はつみあげていきたい。だから事務がたくさんあつても外来者があつても皆の先生たちと今日の、明日の保育の雑談をするのが一番楽しみなのです。と同時にその時間を何ものにもかえがたい貴重な時間になっています。今年始めて二年長児の担任になりました。年少の時の先生が転動されたので……大体二学期が終つたの

ですが、今年一年間で子どもたちから実に多くのことを教えてもらいました。私の出した抵抗が、計画が、そして子どもの中にとびこんだことがよい悪いは別に、子どもたちは実に素晴らしい人間だと再認識させられました。勿論年少の時の先生の教育がよかったからと感謝していますけれど、……それは今まで考えていた子どもの基礎能力の限界が非常に甘くない加減だったということ。子どもも同志の心のつながりの深さ、あたたかさ、人の友情の美しさを子どもによってみつけたような気がします。と同時に反省させられたのですが今まで口では子どもを一人の人間として尊重するというようなことを云いながら、その実余りにも赤ん坊扱いにすぎているしなかったかということ。自分の都合のいい時はつき放して、そうでない時は全く子どもの人格を無視して子ども扱いにする。製作とかの場合には、君たちの好きなようにすればよい、もう考えられるのだからと一人前扱いにするかと思うと、きびしくしなければいけない時は、まるで赤ん坊をいい

くるめるようないい方をする。子どもが思いきって自分をためしてみようとする時に危いからやめろ。勿論程度の問題はあるが、子どもを尊重するならもっと全面的に尊重すべきではないだろうか。中途半端で尊重しているのか、子ども扱いにしているのかわからないことは子どもにとっていい迷惑ではないだろうか。ことばづかいにしてもっと簡単にあっさりと言わなくていい迷惑ではないだろうか。えものだと思えます。子どもたちは本当に尊重されていると知れば先生をも尊重してくるでしょう。よく子どもに馬鹿にされている先生を見かけるがそれは先生が子どもを中途半端に扱っているからだと思う。子どもに遠慮している先生だと思う。子どもに与えることばづかいもずいぶん変ってきているが、まだまだ私などが聞いてふき出すようなことばも使われている。もっともっと自然のことばで対すべきでしょう。

私は大阪の広岡氏から一年前にこんなことを教えて戴いた。『教師は子どもの後にいる時と、前に出ている時とがある』勿論こんな

拙ない表現ではなかったけれど、私にはその時意味はわかっていても実際にはわからなかった。確かに終戦後の風潮として教師は子どもの後について引きずり廻されている時代があった。戦前は全く逆に前からぎゅうぎゅうと子どもを引きずり廻していた。そのどちらも必要であることはわかかっていてわからなかったのです。が今年の子どもによってそれをつかむことが出来たことは何より嬉しいことでした。しみじみとより多くの先生方の御意見は聞かして戴かねばと痛感しました。

そんなことと関連して子どもの叱り方について気になることがあります。何か叱る観点の違っているように思える先生もあるようです。叱るのではなくて小言こご言を云つてといった感じをよく見受けるのです。その子どもの生長の為に、また他の子どもの為に叱ることが必要な場合ははっきり叱るべきだと思います。まだ子どもだからという考えではなくて知らないのだから知らしてやるのが教育ではないでしょうか。なだめてまるめこむという叱り方は子どもをして一般社会を甘く考

えさせはしないでしょうか。少なくとも人生の厳しさも知らしいと思えます。こういうことははいけないんだとわかればしないでしよう。これも中途半端な叱り方をしているは子どもを迷わせるだけです。一人前の人間として叱るのであればかえって子どもは一人前に扱ってくれる喜びを、そして深い愛情を知ることでしょう。子どもの叱り方については今は亡き父が遠い昔放送もし著書も残しましたが実にむづかしいことだと思えます。私の園の同僚が「先生が叱っていると私はひやひやする時があります。でも叱られた子どもがその後さっぱりしていますね」と云われました。私はことば短かく叱ることにしています。善悪の御批判はおまかせします。

だつこ先生、私は自分をこんなに呼んでいます。今日は誰を抱っこしようかな、あの子とのつながりがどんなになったかな、と子どもの来るのが楽しみです。抱っこをしてやるのが好きなんです。なぜって抱っこによって子どもとの、心と心のつながりを私は知ることが出来るからです。ジャンケンして負け

たら抱いてやることもあります。一人ぼっちでいる子を抱き上げて勇気づけてやることもあります。喧嘩をしていたあばれん坊をだまして抱き上げて『ケンカなんかやめちゃえよ』と小声で言ってやると「フン」と云ってまた遊びにいきます。先生と子どもが一对一でしゃべれる機会なのです。「お父ちゃん元気がいい」とだけ聞く場合もあります。私に対してまだまだつながりの薄い子は、からだ全体を固くしています。そのうちにだんだん全身で抱かれるようになってくれます。全身で抱かれてくれる頃になったらきびしく叱っても安心できるのです。

抱っこする！ 私は四十二人の子どもたち一人ひとりとしやべりたいからです。友人を意識しないで一对一で交際したいからです。ジャンケンボン！ これも好きです。なぜって？ おとなが子どもとやってかけ引きなしに勝負が出来るからです。子どもも私も力一ぱい勝負することが出来ます。相撲や鬼ごとはやはりおとなと子どもの力が違います。不自然な負け方はしたくないのです。子ども

も敗けてもらったということはプライドをきずつけられてつまらないと思えます。

マンガの本も大好きです。子どものもって来るマンガを楽しみに読んでは笑っています。おとながマンガなんて言われそうですが、私は無条件です。子どもの話相手になるにはマンガがとていい仲人をしてくれることもあるのです。書きたいことをだらだらと綴ってみました。なんてわがままな教師だろうと思われるでしょうが、それは五人兄妹の末っ子の故とおゆるし下さい。最後に今一番私の感じていることはもともときびしい面のある幼稚園に前進したいということです。勿論礼儀作法なんて七面倒なことではなくて、人間として必要な（おとなになつたらわかるということ）はぬきにして）きびしさを知る幼稚園になって欲しいと思います。施設もスクールバスも必要でしょうが先生と子どもたちとの本当に取組んだ幼稚園の姿が何よりも必要なのではないのでしょうか。先ず先生自体にきびしくありたいものです。

（京都市立乾隆幼稚園）